

# 老人クラブ参加の主体的意味

— 「老人クラブだより」による一考察 —

中山 慎吾

## 1. 本稿の課題

本稿における関心の焦点は、老人クラブの活動へ参加することの、参加する人々にとっての「主体的意味」にある。「主体的意味」を解釈するための方法として、当の老人たちによって書かれた特定の資料（老人クラブだより）をとりあげ、その内容をどう解釈するかにかんして考察を試みる。本稿で主としてあつかうのは、桜村老人クラブ連合会によって発行された、「桜村老人クラブだより」である<sup>(1)</sup>。

ところで、老人クラブが現実の社会的・文化的文脈のなかで形成されていることは、自明ではあるが忘れてはならない点であろう。この点を考えるてがかりとして、綾部恒雄の約縁集団（クラブ集団）論における次の議論に注目したい。綾部は、約縁集団を「何らかの共通の目的・関心を充たすために、一定の約束の下に、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない、パートタイムの私的な集団」と定義し<sup>(2)</sup>、その適応的性格をつぎのように強調している〔綾部、1988:24-33〕。

約縁集団の適応性とは、「血縁集団や地縁集団を基礎に置きながら、社会の変化に即応して、適応的に出現する」という性格を意味する。たとえば、「約縁集団が血縁集団や地縁集団の担っていた多種多様な機能を共同体の崩壊のプロセスの中で次々に代替していく」といったものである。

また綾部は、約縁集団が、都市社会の出現する遙か以前からの歴史をもつことを指摘する〔綾部、1988:206-227〕。日本においては、講集団<sup>(3)</sup>などに代表される「前近代的約縁集団の伝統」が存する。明治期以降の「民権結社、サークル、クラブなど、いわゆる『近代的』約縁集団の中に、日本的約束の原理、

日本的平等主義の系譜を読み取ることができる」であろうという。

綾部のいう「適応性」にかんして確認しておきたいのは、社会構造の変化が直接に集団形成に影響を与えるのではなく、それを媒介するものとして、行為主体の内面的心理が存する、という点である。約縁集団の形成という一種の社会的行動様式の形成の前提として、人々になんらかの内面的動機が存する。本稿においては、社会構造の変化への適応性を念頭におきつつも、主として“参加主体の内面的動機”に探求の焦点をしぼる。

また、約縁集団の「適応性」の指摘から、老人クラブを地域社会や家族と相互に関係しあうものとして把えるという研究方針をひきだすことができる。具体的には、老人クラブ参加の内面的動機と、日々の家庭・地域での生活における内面的心理との関連性という観点から考察がなされうる。このような相互関連は、社会構造の変化が顕著でない場合にも存しうる。

また、「約縁集団の伝統」もまた、内面的心理の介在、および社会化の作用といった観点からも理解しうる。個々人は、社会化をとおして社会の潜在的文化を内面化している。約縁集団は、そのような個々人によって構成される。その結果、集団の意識的活動の側面と情動的側面とを区分したばあい、とりわけ後者の側面において、潜在的文化による浸透がありうる〔山村、1969:58〕。約縁集団における共通性には、現実の特定の集団のありようへの準拠のほか、そのような潜在的文化の浸透による影響も含まれていると考えられる。

以上より、老人クラブの参加主体の内面的動機に関連するものとして、①社会構造の変化、②日々の地域・家庭生活における内面的心理、③内在化されている潜在的文化の3要素が、相互にかさなりあいつつ存在していると考えられる。その主要な相互関係は、①と③が②に反映し、老人クラブ参加の内面的動機に関わる、というものであろう。次節以降の考察は、②の内面的心理の解釈からはじめられる。「①→②」という規定関係への注目には社会意識論的観点、「③→②」というそれは文化本質論的観点とよべるものである〔宮島、1987:223〕。本稿における資料解釈は、相対的には、「③→②」の側面に重点がおかれる。

なお、「主体的」という語は、「行為者の選択の意思に依存すること」〔安田、1980:25〕という限定された意味で用いられるばあいが多い。しかし、老

人クラブに参加する人々の内面的心理においては、自覚的な思考作用とともに、かならずしも自覚的ではない情動作用が重要な位置をしめていると考えられる。そのため、本稿では、行為者の思考作用と情動作用の両者をともに重視するという意図により、「主体的意味」をより広い意味で用いる。なお、「主体的意味」と「内面的動機」とは、本文中で互換的に用いられる。

我妻洋<sup>14</sup>によれば、人間の行動は、無意識の欲求と意識的要求とに動機付けられる。無意識の欲求は反規範的であるばあいが多し。意識的要求は、行動の前や最中や直後に意識される要求（「自覚される要求」）と、後からふりかえてみて意識される要求（「反省的に自覚される要求」）の2つに分けて考えられる。後者の反省的自覚の段階では、合理化、正当化が働くことも少なくない。このように、行為の動機は、「無意識の欲求」、「自覚される要求」、「反省的に自覚される要求」の3種に区分しうる。

本稿においては、「主体的意味」という語に、我妻の区分する3種の動機のすべてが含まれると考える。問題は、これらの動機を、具体的な資料を通してどれだけとらえうるか、という点にある。「老人クラブだより」の文章は、老人クラブの実際の行動とは離れた状況において、個々人によって書かれたものである。したがって、その文章をとおして最も接近しやすいものは、「反省的に自覚される要求」である。この要求に、合理化、正当化がはたらいている可能性があることは、つねに念頭におく必要がある。

無意識の欲求、および合理化・正当化の過程を考慮にいれるならば、老人クラブ参加の「主体的意味」は、かならずしも参加主体自身によって自覚されているとはいえない。すなわち「主体的意味」には、観察者による解釈を必要とする部分が含まれる。したがって本稿の考察においてなされるのは、「主体的意味」についての、“ありうべき解釈”のひとつを呈示するという、限定された試みである。解釈の対象とした主要な資料は、本文中において引用するようにつとめる。本稿における考察は、老人クラブ参加の主体的意味についての組織的な実証研究における、ひとつの段階として位置づけることができる。

## 2. 日々の生活における内面的心理 — 「幸福」の希求 —

老人クラブの会員の人々は、日々の暮らしのなかで、どのような事柄に基本的な関心を抱いているのであろうか。この問いに答える手がかりとして、「老人クラブだより」に寄せられている文章のなかに頻りに用いられる言葉があることに注目したい。そのような言葉の一つに、「幸福」がある。「幸福」「幸せ」ということばが用いられているいくつかの文を次に示す。

「老後の幸福は何と云っても先づ健康である事と思われます。健康であれば自分の行きたい所にはどこへでも行くことが出来、自分の事は自分で出来るということは、何と有難いことでしょう。…新鮮な空気と日光に親しみ、自分の身体に合った運動を毎日する事や偏食をせず、特に年齢を問わず、どんな人にもよいという牛乳や蜂蜜等は、よい食品とおもいます。次には心がいつも安らかで悩みのない事です。家庭も円満である事です。それには欲ばらず、気ばらず、怒らず大きな心を持って、いつもにこにこしてゐられる事が誠によいと思われます。次には物質に困らぬ事、幸い私共老人は老人福祉年金をいただいて居りますことは有難い事と思ひます。次には欲得を抜きにして、はりこんでやれる楽しみの仕事を持つことも幸せな事です。最後に天地万物に感謝が出来、毎日有難い心で暮らせる人も幸せです」[6号, 1980]。

「老人の幸せと喜びは第一に家庭内の平安です。家内中揃って幸せに暮すこと、此れ以上の幸福はないだろう。誰もが健康は願って居り、健康なくして幸福はない。如何に物に不自由せず、金銭があつても、病弱では困る。…老人には老人に合った健康法があるはず、美食して遊んで居たら忽ち終りが訪れるだろう」[15号, 1984]。

「…すべてのものに感謝して、仲よく暮らすのが、幸福への近道かとの感を深めた次第でございます。／寒さに向う折柄でございますが、愛情をもって心おだやかに暮らす事に致しましょう」[15号, 1984]。

「年金が多数の老後の人々に安心と安らぎを興いた事は事実で貧しさから解放された老人の安心感は絶大なるものがある。昔の老人の不幸は殆んどが貧しさゆえの不幸であった。こうした時代が来たのだから幸も健康も心掛次第で自分でつかむことが出来る。我々は意識して健康に務めよう。宗教がどれだけの

人々を救ったか心の貧しさからすくわれたか。老人の今後の課題は健康からと云うことをモットーに保健衛生に勤めよう。長生しても病人では駄目だということを認識したい」[14号, 1984]。

「医師やくすりを否定するのではなく、人間自身に備っている生命力を自覚し、健康に恵まれている人はそれ以上に日常生活のリズムをくずさず、特に食生活に注意し、その人なりに体を動かすこと、喜んで働く老人には老人なりの仕事がある筈です。…健康で楽しく生活出来ることこそ最上の幸福といわねばなりません」[7号, 1980]。

「老人クラブ信条第一行目にお互いに健康で誰とも仲よく楽しく毎日を送りましょうと言ふ事が第一の条件に成って居ります。此の健康はどうすべきかと言う事が大切な問題でありましょう。健康を持続するには暴飲暴食を取止め、減食すべきである。希望を新たにして家の為、世の為に働き掛け、小さな親切運動小さな感謝運動を展開すべきである。人の一生の折目や自然とのかかわりの中でおとずれる危機、それら災厄に対応してさまざまな神仏が生みだされる。これ等の場合は祖先の供養薬師如来様毎日の幸福を念願すべきである」[5号, 1979]。

以上の文に共通してうかがえるのは、日々の幸福を念願しつつ生きている人々の姿である。幸福を確保するための条件として、健康、経済的安定、家庭円満、老人なりの仕事、感謝の心などがあげられている。これらの条件はすべて、日常生活における具体的な経験にふくまれる。それぞれが有機的に関連しあって、幸福感を生み、支えたと考えられている。ここで第一の目標とされているのは、日常生活における主観的感情としての幸福である。仕事も、それ自体として目標とされるのではなく、健康、そして幸福のために必要と考えられている。なお、本節の後半でもふれるが、諸条件のうち、健康、経済的安定などがどちらかといえば幸福感にとっての外的条件であるのにたいし、感謝の心は、幸福を感じる主観のありかたそのものに直接かかわる、いわば内的条件をなす。日常生活におけるさまざまな条件が、外的および内的なはたらきをとおして、幸福感の確保をもたらすと考えられているのである。このことから判断するならば、ここでの「幸福」とは、「日常生活における安心感」の希求といった心情とかなりの部分かさなりあう。

文の筆者たちのこの心情と、日本の民衆宗教にみられるつぎのような心情との間には、類似が認められる。湯浅泰雄によれば、「民衆宗教の『思想』に共通して見出されるのは、いわゆる『現世利益』である。最も多いのは、病苦からの解放・家内の平和・商売繁盛・心のやすらぎ、といった日常生活の平穩無事を願う心情である」<sup>15)</sup>。この点から判断するならば、文の筆者たちの「日常生活における安心感」の希求は、日本の庶民において受け継がれてきた一種の潜在的な文化を反映していると考えられる。

なお、「健康」を強調することに関しては、注意を要する。大貫恵美子は、日本人において普通の病気の原因が非精神的なものと一般に受けとられている傾向を、「物態化」として説明している<sup>16)</sup>。その社会的側面として、「物態化および日本固有の療法の背後にある論理とは、不幸や不運の原因、宇宙の中に存在する悪を、他の人々、ことに患者自身に親しい人々の責任にしないことである」と述べられている。「健康」の重要性を強調することは、ねたきりやボケといった病苦に対する不安感を背景とするとともに、物態化の社会的側面からも解釈されうる。つまり、その強調の背景に、生活上の多様な問題 — たたとえば、家庭内などにおける人間関係の悩み — の存するばあいがありうる。「幸福の条件は第一に健康である」と言明することは、人間関係上の問題が幸福感を強く左右するという事実をあからさまにしない、というはたらきをもつ。この点は、後にのべる「間柄の倫理」とも関連していよう。

「私」と「公」という区分からすれば、文の筆者たちの関心の中心となっているのは、「私」の領域である<sup>17)</sup>。日常生活レベルをこえた一般社会、政治・経済などへの言及は、あまり見られない。これは、そのような事柄に対する関心が第一義的なものではないことを示唆している。ただし、在宅福祉・老人福祉への要望や、村の福祉行政への感謝・支持などの表明はみられる。これは、第一義的な関心領域である「日常生活の安心感」の確保にかかわりのある限りにおいて、政治的領域につよい関心をしめず姿勢と解しうる<sup>18)</sup>。

また、ここで考えられている幸福は、自分一人の幸せといったものではない。家庭円満、仲のよさ、感謝の心などの強調から判断するならば、地域社会の範囲内において生活をともに営む人々との関わりにおいて、幸福が考えられている。このような幸福観は、一般に日本人が、親しい人々との相互関係のなかで

自己を認識するというありかたと関連していると思われる。この関連をとらえるにあたって、次のふたつの文にみられるような、他者にたいする感情を示す表現が注目される。

「…人の性は悪なりと喝波するご人もあるとおり、人間として生れ教養を身につけ、しゅうち心より善人となる。人間社会にともに学び、共に励まし合い助け合い、人を恨らまず、憂えを喜ばず、これが完成した人間そして世渡りの達人ではなかろうか。この世に生を受け、生きる苦しみもあり楽しみもある。第一線を退いたわたしたち、どのようにして毎日を健康で楽しく過すか。要は、禍転じて福となす心構えで皆んなで幸せな人生をおくりたいものである」[13号, 1983]。

「最近あるお坊さんの書かれた本を読みましてところ要は憎み。怒り。うらみ。ねたみ。[句点は原文のまま — 引用者]の思を持つかぎり決して幸福にはなれないという事が書かれてありましてつくづく実感として感じる事ができました。これも年令のせいとも云えるかも知れませんがこれからは肝に銘じて生活することと決心致しました。…皆様とにかくクヨクヨしても何の足しにもならないですもの明るく明るく笑って暮らす事に致しましょう」[14号, 1984]。

ふたつの文では、「明るさ」「楽しみ」「喜び」といった、いわば情緒の明朗さを示す語に対して、「苦しみ」「憂え」「怒り」「うらみ」「ねたみ」などの否定的な情緒が意識されている。情緒の明朗さと否定的情緒との対照は、「他者との心のつながりを基本にする間柄の倫理」にかんする次の説明に従って理解しうる。湯浅によれば、「人間の間柄というものは愛や友情、誠実、喜びといった光りの面だけでなく、恨み、ねたみ、憎しみ、怒りといったくらい影の面でもつながっている」[湯浅, 1981:140]。人間関係のうえで問題が生じたばあい、他者との心のつながりを重視するがゆえに、そのような問題にかんして相対的に強い挫折感・失敗感を感じることになる、と考えられる。そのため、引用文におけるように、否定的情緒が意識され、その克服が念願されるのである。

人々の「日常生活における安心感」の希求とかかわる潜在的文化のおそらく中核部分に、このような間柄の倫理が位置すると考えられる。そのため、日常

生活が営まれる場が、親しい他者との関係を含むものとしてイメージされているのだと思われる。その場合、間柄の倫理は、たんに外的な人間関係を規制する原則であるのではなく、自分自身の人格についての観念と直接にかかわるものであることに注意しなければならない<sup>(9)</sup>。引用文中の「完成した人間、そして世渡りの達人」ということばからは、望ましい人格を形成していくことへの願いの存在がうかがわれる。否定的な感情をコントロールし、明朗な感情を保つことのできるような人格の形成への希望である。この心情は、健康や経済的安定への願いとは異質のものである。

このような点を重視するならば、「幸福」を感じる前提となるものは、つぎの二つに区分されよう。安定した日常生活をもたらすような外的な諸条件のありかた（健康、経済的安定、家庭円満など）と、日常生活を安定した情緒のなかで暮らすことのできるような内的な条件としての人格のありかた、の二種である。なお、「外的」条件といっても、それは、幸福を感じる個人の側にたって理解されるものである。したがって、内的条件の変化によって外的条件のありかたも変わってくる。外的諸条件のうち、とりわけ人間関係にかんするものは、内面の人格のありようと、密接に結びついている<sup>(10)</sup>。

以上、内面的心理にたいする潜在的文化による規定という観点を中心にして、考察をおこなってきた。以上の考察が妥当であるとしても、次のような問いが残るであろう。老人クラブの成員にとって「日常生活における安心感」の希求が相対的に強く感じられるなんらかの要因があるとしたら、それは何であろうか。この問いに対して、まず、社会構造の変化による影響が考察されねばなるまい。また、同時出生集団としての特殊性、老年期というライフ・ステージの特殊性などによる影響が考えられる。これらの要因による規定にかんしては、別の機会に検討したい。ここでは、人々の主要な内面的心理のありようを把握するにとどめておく。

老年期というライフ・ステージのもつ特質として次のような点に注目することができよう。社会問題などの外の世界の問題よりも、自己の内部の人格の問題に、相対的に強い関心がおかれるという、老年期の一般的特質である。E・H・エリクソンのライフ・サイクル論<sup>(11)</sup>においては、成人期における対立が「生殖性対停滯」であるのにたいし、老年期における対立は「統合対絶望」と



されている。「生殖性」においては外の世界とのかかわりに重点がおかれているのに対し、「統合」においては、自分自身の人生周期を受け入れ、内的な全体性を達成するというかたちで、生活史的過去をも含む自己の内部そのもののかかわりに重点がおかれている。本稿における対象者となっている人々においても、老年期における「統合」という課題の存在が、自己の人格のありかたおよびそれと密接に関連する間柄の倫理に、関心をつよくもたせることとなっている、という側面もあろう。

### 3. 定例会参加の主体的意味 — 「仕事」と「楽しみ」 —

老人クラブの諸活動のうち、本節では定例会にかんする記述に限定して考察することにしたい。他の活動にかんする記述は、考察するに必ずしも十分な量ではないためである<sup>(1)(2)</sup>。定例会（月例会とよばれることもある）は、ほとんどのばあいひと月に一度ずつ行なわれ、老人クラブの主要な活動のひとつとなっている。その会場は、ふつうその地区の研修センターや公民館などである。たとえば、それは次のように描かれている。

「私たちの老人会」 [6号, 1980]

「光陰矢の如しと云いますが、月日の流れは早いもので、私も間もなく七十歳、長い様で短い年月であります。／私が老人会に入れて頂いて、はや十年、先輩皆様方が健康と親睦を目的に、老人会発展の為に努力して居られる事に心から感謝して居ります。私達の老人会は、毎月一回は必ず懇親会を開いております。会員の皆さんもそれを楽しみに待って居て、定例会として朝早くより元気に集り、神社清掃、研修センターの掃除を男性の方が行い、女性の方はお茶や昼食の調理と、手分けして、仲良く楽しみ乍ら行って居ます。／仕事がすんだら懇親会に移り会長さんの挨拶あり、その後は、のんだり食べたり、語り合い、そのうちに歌や踊りも出て、にぎやかに一日をすごします。／年に一回か二回の旅行をして楽しかった思い出話に、花が咲くこともあります。／今後もお互いに信じ合い励ましあって、健康で明るい人生を送る様心掛け、益々老人会の発展して行く事をお祈り致します。」

ここで紹介されている定例会は、神社清掃などを行なう前半と、懇親会を行なう後半とにわかれている。前半の作業が、「仕事」として把握されている点に興味深い。とはいえそれも、楽しみながらおこなわれている。定例会の後半は「懇親会」とよばれ、それは、のんびり食べたり、歌や踊りがでたりといった、情緒性の高い活動として描かれている。この懇親会と主要にかかわる動機は、「仕事」に対して「楽しみ」と名付けることができる。つぎにあげる例文などの記述をも踏まえて判断するならば、定例会における参加者の主要な動機は「仕事」と「楽しみ」の2つである、といえるだろう。

「研修センターは部落の中央で敷地が元神社の跡のため千二百坪以上もあり、…。…五月より九月までの期間は雑草が繁茂しますので、例会度に草取を実施終了次第懇親会に移るのですが、其の前必ず老人クラブ信条の朗読をしてから懇親会に移り、歌や踊り又経験話等で楽しい一日を過ごします」[9号, 1981]。

「毎月十五日に神社清掃後、研修センターで、老人クラブ信条朗読、いかに楽しく健康でいられるかを話し合いし、茶話会後うたや踊り、輪投をやり面白く閉会す」[12号, 1983]。

「例会は月一回とし神社の清掃と、竹箒作り雑巾作りなど生産活動をやり、桜中や栄小へすでに竹箒六〇本雑巾四〇枚を寄贈し感謝されている」[5号, 1979]。

「毎月一回の体見神社の清掃は滝のせせらぎを耳にしながら殊の外楽しいものです。又老人としての責任感の修養にもなると思います。以前から今も尚続けられております」[15号, 1984]。

「…田園都市とも云うべきM部落に結ばれた私たちの睦会、親と子ほどの隔たりもある会員たち、共に理解し合って会の名の如く睦まじく毎月の定例会に身の修養と楽しみを味わっております」[9号, 1981]。

「毎月二十一日（大師の日）を例会とし午前八時半頃より研修センターの内外を掃除し、センターの横にある大師様の御堂をきれいにし季節の花を供えお賽銭を上げて皆様の幸せを祈ります。そしてお茶を飲み四方山の話に花を咲かせますが、時にはお鮎やおそばに舌鼓を打ち、話も弾みますが年に何度かレストラン、お鮎屋さんに行き出しちよっぴりぜいたくをします」[21号, 1987]。

神社などの清掃や、竹ぼうき、雑巾づくりなどの仕事は、自分たちの住む地

域の範囲内における奉仕作業である。そのような作業は、より広い社会的領域とは直接にはかかわらない。奉仕作業のこのような特質は、定例会での「仕事」が、参加者の「日常生活における安心感」の希求と結びついたものであることを示唆している。研修センターや神社は、地縁の連帯にとっての重要な場であり、そのような場所を清掃することは、地縁集団への奉仕という意味をもつと考えられる。次の文においては、そのような動機が意識されている。

「会の運営には、区民の集会の場である、研修センター内外の除草・清掃作業を行って居ります。これも今の若者達の一助にもとの老人達の親心です。又年二回会員の親睦をはかって、日帰り旅行を十分楽しんで居ります。定例会には、老人の信衆を唱和して開始し老人としての生甲斐を楽しんで居ります。今センター内には前会長の植えて下さったしだれ柳が大きくなって、大きくやさしく風になびいています。／私たち老人は、この柳の枝のように、風の吹くまま世にさからわず、少しでも部落のため役立って行くことが私達の今の役目と考います。有難い時世に元気で、すごせる幸福をかみしめながら活動をつづけています」[5号, 1979]。

「若者達の一助」「部落のため役立っていく」という記述においては、地域内における他世代の人々に喜んでもらうことが意識されている。このような意識は、次のように解しうる。すなわち他世代の人々の心理に訴えかけることをとおして、日々の生活を自分たちにとって暮らしやすいものに変えていこうという動機が、はたらいっているのではなかろうか。いいかえれば、「直面した状況に人間的要素を持ち込み、それによって自らの制御下におくことに、あらゆる努力、方策を尽す」<sup>(13)</sup>ということである。

なお、神社の清掃を、「責任感の修養」と意味づけている文もみられる。このような動機は、外的状況の制御ではなく、内面の人格の向上にかかわる側面である。また、前節における引用文の中に、「希望を新たにして家の為、世の為に働き掛け、小さな親切運動小さな感謝運動を展開すべきである」とあった。定例会における奉仕活動も、そのような親切・感謝運動に含まれよう。そのばあいにみられるのは、「親切心・感謝心の養成」といった動機であり、これも内面の人格の向上にかかわるものである。以上のような「責任感の修養」「親切心・感謝心の養成」といった動機も、「仕事」という内面的動機に含まれる

と考えられる。

ところで、奉仕作業と懇親会に共通するのは、それらがともに、身体の運動をともなう共同の活動である、という点である。この共同の活動 — とくに懇親会 — には、独特の情緒的雰囲気<sup>(14)</sup>がうかがわれる。このような雰囲気の達成を目指すという内面的動機を、「楽しみ」と名付けたのである。ところでここでの情緒的雰囲気とは、人々の内面においては、前節にみたような「情緒的明朗さ」を経験することにほかならない。ここから、日々の生活における内面的心理と、老人クラブ参加の内面的動機との関連が考えられる。

「楽しみ」という言葉じたいの用いられかたに注目してみる。引用文において用いられる頻度の高さからも、定例会の活動において「楽しみ」という言葉じたいが重視されているのがわかる。前節の引用文中においても、「健康で楽しく生活できることこそ最上の幸福」「どのように毎日を健康で楽しく過ごすか」といった記述がみられた。これらの記述が、老人クラブ信条における「お互いに健康で誰とも仲よく楽しく毎日を送りましょう」という陳述に準拠していると考えられる。とはいえ、そのような準拠は、実際に筆者たち自身の内面的心理に合致しているがゆえになされたのだといえる。次の文でも、同様の心情が意識されている。

「一月十五日新年会、定例会は毎月十一日に開催す。老人信条朗読後、私ら老人は、毎日楽しく暮らすにはどの用[様の意味であろう — 引用者]にしたらいかを話あい、それには自己の健康管理に注意して、体と心を働かせる活動をして老化を防ぎ見聞を広め、お互いの立場に理解と協調を計り、地域の発展に経験を生かし、小さな奉仕活動、小さな生産活動を通して、明るい村づくりに協力していく事であります。毎日神社清掃奉仕、老人の健康活動としてクローケ一週二回開催」[16号, 1985]。

この老人会のぼあい、定例会で話しあわれていることは、「毎日楽しく暮らすにはどのようにしたらよいか」という関心を中核としている。そのぼあいの「毎日楽しく暮らす」とは、文字通り日々の生活にかかわっている。それは、前節でみたような、日常生活における安心感を求める心情にほかなるまい。とりわけ、日常生活における情緒的明朗さが意識されているのである。そのような心情を目標として考えられている具体的な活動には、老人クラブにおける神

社清掃奉仕やクロッケーが含まれている。このような考え方は、日々の生活において願われている目標の一部をなす情緒的明朗さが、老人クラブ参加の内面的動機の一部をなしていることを示している。

老人クラブの情緒的雰囲気は、日々の生活においてはかならずしも活性化されていない情緒を、共同の諸活動を通して解放する、という性格をもつと考えられる。いうなれば、人々の内面における情緒性の「回復」、といった側面である。実際には、次の文にみられるように、必ずしも明朗な情緒のみが活性化されるというわけではない。しかしここでも、「楽しみ」の追求が強調されている。

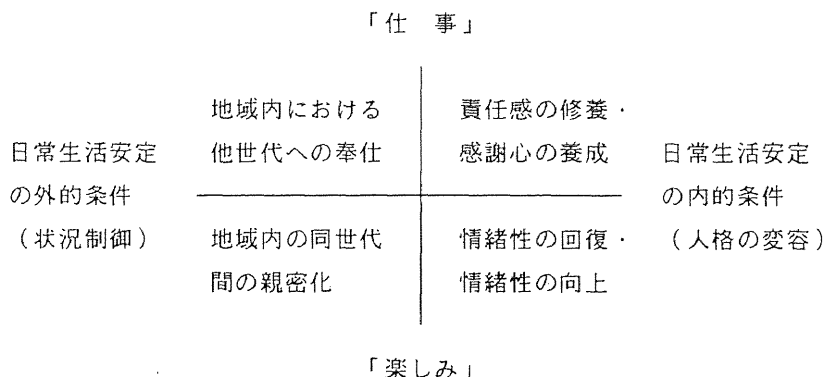
「…酒を飲みすぎると、平素忍んでいたこと等が爆発、…心は角に腹が立ち、人は小さく己大きく、こうした小心者となり果て自分ながらあきれているが、またよそ様のこうした醜体を見るにつけ、反省もいたし、また私の後継者が出来たのかと、残念に思うこともある。老人会員は現役時代、教員、公務員、会社員、商人、職人、それにひたすら農のみに生きて来た人たちの集りで、性格や趣味も違う。また完成された人物のみでもない、これらをふまえて太っ腹になる修養、いつまでも人間づくりの勉強が肝要と思考される。末尾に老人クラブ信条の奉仕活動とか、だれとも仲よくとかありますが、これが実行に移し、残り少ない人生を、みんなで楽しく一日一日を、送ろうではありませんか」  
[17号, 1985]。

上の文中に、「人間づくりの勉強」とある。この記述から推測するならば、「楽しみ」の追求には、情緒性の回復という意味合いに加えて、情緒性の「向上」という意味合いが含まれる、と考えられる。

なお、「仲よく」という語や、間柄の倫理が人々に内在化されているという点から解釈すれば、人々の内的条件にかかわる「情緒性の回復・向上」<sup>(15)</sup>は、同時に「関係の安定化、親密化」として外的条件をなしているといえよう。

以上の解釈を簡潔にまとめておく。老人クラブ参加の内面的動機としては、集団内における「楽しみ」と、集団外の他者に関わる「仕事」とが、その主要部分に存する。それらは、日常生活における安心感の希求という内面的心理を前提にしている。「仕事」と「楽しみ」のそれぞれの動機は、日常生活の安定のための外的条件と内的条件の双方にかかわる。どちらかといえば、「仕事」

は外的条件に、「楽しみ」は内的条件に主要にかかわる。このように解釈された、定例会参加の主體的意味は、つぎの図のように整理することができる。



記述における強調のされかたから判断して、主體的意味の中心となっているのは、「楽しみ」の動機、とりわけ図中の右下部分の「情緒性の回復・向上」であろう。また、日常生活安定の外的条件にかかわっているのは、同世代および他世代との人間関係にかかわる動機であることがわかる。

前節と本節における以上の考察に加えて、社会構造の変化を考慮に入れる必要がある。このばあい、次の記述が手がかりとなる。

「近所隣りが気軽に声をかけ合える雰囲気も、農村の都市化に伴なって、家屋の構造の変化で訪問すれば、応接室に通されて、高級菓子を出されては、菜葉のこうこや、梅干しの頃と違って、気易く声をかけたり、上がりこむわけにもいかず、疎遠になって、電話で用を達すのが、現状と思います。／いろいろをかこんで、煙いのをがまんして、菜葉や大根の茶菓子で、自家製の茶を、がぶがぶ飲みながら、夜更けまで語り合った農村はどこかへ行ってしまった。あの頃の農村は、経済的には恵まれていないが、暮らしよかったように思います。…私達は、単位老人会を充実して、気軽に声をかけ合い、茶飲み話を、昔の姿に戻し、行政機関に手を貸したり、ボランティア [原文のまま——引用者] になって、隣り近所と協力して、地についた自分達の老人福祉を充実していく、意気込みが、私達の、身体的健康と精神的若さを保つ、源動力になると信じます」

[18号, 1986]。

この文で述べられているのは、都市化にともない「茶飲み話」という一種の行動様式が消失する傾向にあること、そしてそれを代替するものとして老人クラブの充実が位置づけられることである。この「茶飲み話」は、任意に成立した小グループにより、打ち解けた雰囲気の中で互いに受容的な態度で語り合うというものであろう。そのような語り合いを通して、日常生活における悩みを解消し、安心感を確保する手段となっていたと推測しうる。この点にかんする検討は別の機会におこないたいが、社会構造の変化として見逃すべきではないのは、日常生活における安心感の確保に直接に寄与するような行動様式が変化（消失・衰退など）しているかどうかである<sup>16)</sup>。

「日常生活における安心感」の希求は、間柄の倫理などの潜在的文化の内面化によるのみではなく、このように社会構造の変化によって強められている、といえる。「日常生活における安心感」を願う心情の強まりは、次節で扱うクロッケー導入のような、老人クラブ内でのあらたな行動様式の模索・受容の背景のひとつとなっていると思われる。

#### 4. クロッケー参加の主体的意味

クロッケーは、桜村においては、1981年(昭和56年)ごろからとり入れられ、各老人会の人々によって行われるようになった<sup>17)</sup>。クロッケーに参加する人人の内面的動機とは、どのようなものであろうか。クロッケーに、「親睦」と「健康」というふたつの側面をみとめるのが一般的なようである。

「ややもすると老人は一人ふさぎに家にこもり勝なものですがこの様な球技を楽しむ事は同年代の親睦を深めそして健康に役立つ一挙兩得な面が有ります。当部落では今春、FK氏が所有の梅畑の一部を開放してクロッケーのコートを作って下さいました。毎週日曜日ごとに十数名の同好の者が集って楽しんで居ります。…適当なコートが出来た事は老人の親睦の場として実に結構な次第であります」[13号, 1983]。

「クロッケーは老人に適応したスポーツで、競いながら心と心の交流が得られ、

尚一層の睦じさを求めて残り少ない人生を楽しみましょう」[17号, 1985]。

クロッケーについての記述の大部分にかんしていえることは、親睦、楽しみ、心の交流などを強調する表現が多く、競争・闘争などの表現はあまりみられない、ということである。競技にかんする記述がなされる場合も、相手チームとの競争よりも、自分のチーム内の和が強調される<sup>118)</sup>。現実には、各老人クラブ間に、クロッケー大会をめぐる競争がみられるようである。競争のいきすぎた重視にたいして危機感を表明し、レクリエーションとしてのクロッケーをおこなうことを主張する文（「クロッケー雑感」）もみられる。その文でいわれていることを支持する文も、「クロッケー雑感をよんで」としてそのつぎの号に寄せられている<sup>119)</sup>。それを批判したり、競争の重視を主張するような文は、みいだせない。

「老人クラブだより」でのクロッケーにかんする文のなかで、クロッケーの合い間の休憩時間の楽しみに言及されるばあいは多い。このことは、「親睦」の重視と関連していると思われる。

「3時の一腹（服であろう — 引用者）に持寄った菓子で飲むお茶は最高」[18号, 1986]。

「…同じ年寄り仲間達とお茶を飲み、にぎやかにおしゃべりして一日中クロッケーの音に暮れるのが長生きのための日課みたいなこの頃になりました」[20号, 1987]。

「YY様御寄贈の縁台で楽しい午後の一服（なーに遊びだもの）と言って下さる友の温情に感激して明日に希望を持ちたいと思います」[17号, 1985]。

引用文など<sup>120)</sup>から判断すれば、休憩時間の雰囲気は、定例会において懇親会のもつそれと類似している。ただし場所は、研修センターではなくて、クロッケー場の縁台や休憩所になっている。練習中の経験については、たとえば参加者のひとは次のように表現している。

「青空をあおぎ、体一ぱいにすう清い空気、打たれては球を追う姿が、だんだんと若やいでくる自分の命。打った球が的中すると両手を上げて喜び、はずれるとキャーと叫ぶ声に、皆どっと腹をかかえて笑う！。ねらった球がはずれて、場外へ出てしまい、土をたたいて残念がる姿、笑い笑いの連続にクロッケーはいいなあー。『こんなに笑えてすばらしい運動だよな……。』と今さらな



がら、老人としてのスポーツを考えた人や、いつもたのしくゲームをしている近所の皆様や、場所を提供して下さった地主さんに、心から感謝しています」[15号, 1984]。

「笑い」「楽しく」とあるように、情緒性の高い雰囲気は明確に表現されている。クロッケーというスポーツは、明朗な情緒を活性化させるうえで適切な手段である、という性格をもつようである。同様の経験を短歌・俳句に表現している人も何人かいる。

「世事忘れ和気合々と競じ合う老らクロッケーに幸を見出だす」[12号, 1983]

「クロッケー一年を忘れし秋の暮れ」[15号, 1984]

「ボケ老にならざりしとぞクロッケー」[16号, 1985]

「クロッケー息白くして声はずむ」[18号, 1986]

「また一つフープを通す度ごとに苦労の歩み忘れてはしゃぐ

指先のしびれも忘れ打つボール乙女の如く若返るかな」[18号, 1986]

これらの多くに共通しているのが、「忘れる」ということばである。世事、年、苦労の歩み、指先のしびれが、忘れる対象となっている。これらの対象は、日々の生活において人々をとらえている悩みであろう。このような悩みは「日常生活における安心感」の確保を阻む条件である。「忘れる」とは、練習に熱中することによって、不安・悩みなどを忘れる、ということである<sup>(21)</sup>。

また、「ボケの防止」という考えは、クロッケーに参加する多くの人々にみられるようである。老人クラブの会長のひとりI氏によれば、「ふだん口癖のように、『これをやれば、もう、ボケるのも遅れるし』」と話されているという。

「老人の健康を保つには、クロッケーが一番よいと思います。からだを動かし頭をつかうからボケ老人、寝たきり老人にもならないと思います」[18号, 1986]。

「…健康を約束するゲートボール、クロッケー競技等娯楽的な運動と集いを楽しみに一日一日を楽しく暮らす事が健康のため何よりだと思います。…私達老人会員十数名位で殆んど毎日集って楽しく笑って長寿と健康を願って、ボケ老人にはならぬ様にとバカリバカリと木槌の音も高らかに響かせながら張り切って日の沈むまで頑張って居ます」[20号, 1987]。

現在の医学的研究では、クロッケー活動が老人性痴呆の発生を阻止するという医学的効果は、かならずしも実証されているとはいえない。しかし、最後の引用文にある、「健康を約束する」「集って楽しく笑って長寿と健康を願って」といった表現に注目するならば、クロッケーに参加するその場において、健康にかんする不安が解消される、という心理的効果がみとめられる。すなわち、「親睦」と「健康」は、親睦を通して健康への不安が解消されるというかたちでの関連性をもつ。

さらに、さきにふれた「物態化」の観点から、「ボケ」にかんして次のように考えることができる<sup>12)</sup>。「ボケ」という語は、その意味に曖昧さを有しており、単なる医学上の疾病のカテゴリーを指しているのではない。「ボケ」という言葉を通じて人々のさまざまな意味や感情（とくに懊悩）が表現されている、と考えることができる。さまざまな懊悩が、たとえば親しい人々との人間関係に根ざしているとしても、「ボケ」への不安を強調することをとおして、懊悩の原因を他者のせいにはせずすむ。「ボケ」の予防策としてクロッケーという身体的な活動がとられている。そのような活動は、実際に人々の心理にたいして治療的な効果を発揮する。このようにして、自らの心理的問題の存在をあからさまにしないことによりかえって、そのような心理的問題に積極的に取り組むことが可能になる、と考えられるのである。

練習の経験、および休憩時間の記述についての以上の考察より、クロッケーにおいては、定例会にみられた内面的動機のうち、「楽しみ」の側面が、純化されたかたちで現れてきているのがわかる。「楽しみ」を主要な動機とするクロッケーに、多くの人々が参加するようになったという事実は、老人クラブ参加にとって、「仕事」よりも「楽しみ」がより強い動機であるという判断を支持すると思われる。定例会とクロッケーは、「楽しみ」という主体的意味の存在において、共通しているのである。

ただし、「楽しみ」という動機的一方で、大会において勝ちすすみ、優勝の栄冠をかちえたいという動機は、確かに存するようである。競争の緊張が楽しさを増加させる、という側面もあろう。逆に、勝利への動機づけに傾きすぎる結果、否定的な情緒を生じさせることもかなりあるらしい。そのような否定的な情緒は、日常生活のなかでの、克服されるべき情緒なのであった。そのため、

競争の重視の危険性を指摘する文章が書かれる、という反応がおこったのだと思われる。もしも、否定的な情緒が人々の内面において優越するならば、日常生活における安心感の確保に第一義的な関心をおくという内面的心理のありよう自体が、変更をこうむることになるかもしれない。

いずれにせよ、クロッキーの導入は、老人クラブの成員の多くに、行動様式の変化をもたらした。クロッキーだけでなく、今後もさまざまなかたちで新しい行動様式の模索がなされるであろう。ここで確認しておきたいのは、行動様式の受容が、人々の内面的心理における要求をみたく、ということを経験とするであろう、ということである<sup>(23)</sup>。ここでは十分には検討できないが、老人福祉センターで設けられた、舞踊講座、カラオケ愛好会、陶芸講座なども、この観点から考察しうる。

## 5. 今後の研究課題 — 結びにかえて —

老人クラブの主体的意味にかんする以上の考察を、より充実した資料の収集・読解をとおして検証・展開していくことが、これからの課題である。今後の資料の収集にかんする見通しを述べて、本稿の結びとしたい。

資料収集の方法にかんしていえば、調査票、面接、行動観察などの方法を併用する必要がある。また、研究対象にかんしても範囲を広げ、本稿で対象とした桜村老人クラブの事例を、空間的および歴史的比較を通して相対的にとらえなおす必要があろう。さしあたり、次の4種の比較が考えられる。

①本稿でとりあげた桜地区内における比較。桜地区内には、比較的あたらしく移ってきた人々（新住民とよばれる）が主なメンバーとしてつくられた老人クラブがいくつかある（本稿の考察は、そのような老人クラブを除く、いわゆる旧住民中心による老人クラブに対象を限定して行われた）。本稿の考察の対象となった老人クラブとは、地縁集団のあり方（共同体の有無）などさまざまな点で異なっている。②他地域の老人クラブとの比較。たとえば、大都市地域の老人クラブとの比較は重要であろう。③過去の老年集団との比較。例えば、戦前、桜村においては、「念仏衆」とよばれる老年集団があったという<sup>(24)</sup>。

④現存する他の老年集団との比較。たとえば、社会運動、高齢者教室など。社会運動<sup>(25)</sup>は、より広範な社会的領域とかかわることを志向する点で、また高齢者教室<sup>(26)</sup>は、知識・技術の習得への志向がつよいという点で、それぞれ本稿における老人クラブと異なっている。

以上のような研究の展開を通じて、老人クラブ参加の主体的意味をより適確に理解し、さらに高齢者がとりむすぶ集団の総体へと視野を広げていくことができる。

最後に、蛇足ながらも一度、本稿であつかった老人クラブのメンバーの内面的心理をふりかえってみたい。彼らにとって、「日常生活における安心感」の希求が第一義的なものであり、それは彼ら個々人の内面の人格のありようとも結びついているであろうと、我々は解釈した。このような心情は、現在の産業社会の支配的価値、たとえば「進歩」「産業優先」などとは異なるものである。産業社会において社会的地位や財産などのいわば外的な“栄光”が重視されるのにたいし、老人クラブの人々の多くにおいては内面の“輝き”のようなものに近づくことが求められている、という対照のもつ意味を、われわれは考えていかななくてはならないだろう。彼らの内面にむけての思索が、抽象的な平面においてなされるのではなしに、老人クラブという共同の場における具体的体験を伴っているという点に、彼らの強みがある。われわれのみてきた老人クラブの人々の心情と行為には、「近代産業社会の価値の総体」<sup>(27)</sup>を問いなおす、ひとつの契機が含まれている<sup>(28)</sup>。

## <注>

(1) 年2回発行の、6-8頁ていどの広報誌で、桜村内の老人クラブから原稿を募集し、また読者もおなじく老人クラブの人々である。誌面の構成としては、まず、連合会長、村長などのあいさつ文があり、次に投稿による400-800字ていどの小文が10数篇、おわりの1頁ほどに文芸欄として詩、短歌、俳句などが載っている。投稿される小文でとりあげられている主題には、さまざまなものがある。自分の人生についての回顧、個人の旅行の記録、現在の自分の生活についての紹介なども多い。みずからの老人クラブの活動に言及するばあいもかなりある。それらの文章をとおして、老人クラブのメンバーの発想のありようをうかがい知ることができる。

参照された資料は第4号(1979年3月20発行)から第21号(1987年7

- 月1日発行)までの期間のものである。「老人クラブだより」からの引用は、引用文の末尾に号数と発行年をしるす。[4号, 1979]とあるばあい、1979年に発行された第4号からの引用であることを意味する。誤植あるいは誤記と思われるばあいも、原文のままのかたちで引用することにする。なお、「…」は、中略の意味である。「/」は改行の意味である。固有名詞は、原則としてアルファベットで表わす。第21号の「老人クラブだより」によると、1987年7月現在、桜村内には29の単位老人クラブがあり、会員数は合計1109人(男性373人、女性736人)となっている。原稿募集は、連合会長名で各単位老人クラブの会長をとおして会員の人々に依頼するというかたちをとっている。集まった原稿を5名の編集委員が整理し、年に2号ずつ発行される。なお、つくば市誕生の結果、「桜村」は現在では近隣町村とともに「つくば市」となっている。つくば市誕生後の老人クラブの変化にかんしては、他の機会に検討したい。
- (2) [綾部, 1988: 6-7]。綾部は、自律的な個の任意的な結び付きという含意をもつ“ボランティア・アソシエーション”よりもさらに包括的な集団概念として、“約縁集団”という概念を提唱している。なお、老人クラブも約縁集団にふくまれる[綾部, 1988: 216-217]。
  - (3) 柳川啓一によれば、「<講>は、「仲間」をつくり出す場である。日本の集団一般において、非公式的なグループは必要であるが、<講>はそれに密接に関連している」[柳川, 1987: 70]。
  - (4) [我妻, 1981: 586-590]。我妻によれば、「客観的あるいは外的準拠枠」と区別される「主観的内的準拠枠」は、意識的経験に提示された現象界のみに限定して考えられるべきではない[我妻, 1964: 35-38]。
  - (5) [湯浅, 1981: 586-590]。大貫も、日本人が来世よりも現実の生活を重視していることを指摘している[大貫, 1985: 103-104; 206]。
  - (6) [大貫, 1985: 118-137]。大貫は、「水子供養」の現象にかんして、水子は多義的象徴であり、これを通じて多数の女性がさまざまな懊悩を表現していると述べている[大貫, 1985: 125; 222]。ここでの「健康」も、それを通じてさまざまな悩みを表現しようような多義的象徴と解しうる。クロッキー活動にかんする考察でふれるが、高齢者にとっての“ボケ”は、女性にとっての“水子”とかなりの部分において類似するはたらきをもつ象徴であると思われる。
  - (7) 「私」の領域の重視という点では、高度成長期における「私化」[宮島, 1983; 1987]によって生じた生活スタイルと類似している。しかし、ここでの老人クラブの人々の意識においては、社会構造の変化の影響よりも、文化的要因の影響が強いと思われる。
  - (8) この政治意識の面においても、「私生活のもとでの政治意識のきわめて両義的な性質」[宮島, 1983: 170]との類似がみられる。
  - (9) 浜口は、人間関係のありかた(「根源的な人的連関」)としての「間柄」概念と、自己認識のありかた(「人間モデル」)としての「間人」概念との結びつきを指摘している[浜口, 1982: 12]。プラースにも同様の指摘がみられる[Plath, 1980=1985: 313-321]。
  - (10) 幸福の外的条件と内的条件の区分は、湯浅の議論に示唆をうけている[湯浅, 1989: 232-238]。
  - (11) [Erikson, 1950→1963=1977: 343-347, 1976=1986, 1982: 61-66]。
  - (12) 一年のあいだに桜村の老人クラブの多くでなされている活動としては、

定例会、旅行、新年会・忘年会、神社・寺・忠魂碑などの清掃、芸能発表・作品展示大会への参加、クロッケー大会への参加、亡くなった会員への墓参り（会葬がおこなわれている場合もある）などがある。定例会についての記述から解釈される参加者の内面的動機は、他の諸活動の内面的動機とかなりの部分かさなると思われる。なお、クロッケーにかんしては多くの記述がみられる。クロッケーは老人クラブの活動のなかでも比較的あたらしくとりいれられた行動様式、という性格をもつので、次節で独立した考察をおこなう。

一年のあいだの行事に関する記述は、例えば次のようなものである。「みのりの会の記」 [5号、1979]

「今年も残り少なくなった、一月七日からの歩みをふりかえって見よう。／一月七日 新年会・永年役員として盡力された方に感謝状を贈呈、寝たきり老人の慰問を行う。／二月二十二日 定例会・定例会は毎月開催し月額二〇〇円の会費を充当する。レクリエーションの外教養の三分間という時間を設けて老人の心構いや健康管理などを話し合う。／三月三日 水戸観梅行、諧楽園歴史館見学、常盤神社参拝。／四月十三日 定例会、部落公民館清掃／四月二十七日 館林つつじ園見学、茂林寺大宝八幡参拝／五月二十九日 定例会、部落公民館の除草とカンナ植付／六月十八日 部落公民館の清掃と除草剤の撒布／七月二日 阿見武器学校見学、／七月二十一日 定例会、七月二日の反省会と九月十五日の敬老の日の芸能発表と作品展示品について協議／八月九日 部落公民館の清掃と除草剤撒布、役員奉仕／八月二十二日 定例会、例会には要項を印刷配布、三分間教養として桜村少年教室（一泊二日）の状況を話し家庭教育の重要なことを語り合う。九月十五日 出品する寄書を作成する。／九月十五日 芸能発表作品展示会に出席、出演者六名、出品者二名、会員出席人員二六名、午後三時より部落に於いて定例会／九月十八日・十九日 鬼怒川温泉一泊二日旅行 日光見学」

「むつまじ会日記」 [12号、1983]

「七月一九日筑波山ホテル一望で月例会開催／七月二〇日八坂神社と忠魂碑清掃奉仕／七月三十一日会員MN殿葬儀に会員会葬した／八月七日荃崎村村民いこいの家で月例会開催／九月一日桜老連芸能発表大会参加／九月九日南公民館で月例会開催／一〇月一日南公民館で月例会開催／一〇月二五日桜老連クロッケー大会参加／十一月二四日筑波山ホテル一望で月例会開催／十二月七日新治村なつ川で月例会開催／十二月二八日八坂神社と忠魂碑清掃奉仕／一月二日筑波山ホテル一望で月例会開催」

- (13) [大貫、1985:276]。なお、大貫の著書では、引用した部分において、巨大で非人間的でありがちな病院の制度にのみこまれることのないよう、たとえば患者の家族や友人がお守りをもたらしてくるなど、さまざまな方法を用いることが指摘されている。大貫は他の箇所でも、「ただ運命の決するままの結果を待つのと反対に、積極的に現実を転換しようという企て」を「魔法」ということばで表現している [大貫、1985:106, 133-134]。

- (14) 旅行や忘年会・新年会などの記述にも、情緒的な雰囲気は顕著にみられる。旅行についての記述を引用しておく。

「去る六月十三日には、役場主管課の肝入りで花栽培の研究を主眼とし

た一日の旅、佐原のあやめ祭りに行つて来ました。花は三分咲きでしたが精魂込めた水花の栽培。やはり私たちが趣味とする菊栽培と一致するところがあり無から有を求める苦勞と楽しみ感無量であった。帰途香取神社・宗吾様・成田山と豊年満作国家安全を祈願。車中はいつもながらの、のど自慢無事それぞれの我が家に。来る七月定例会には、これが反省会を開き一歩前進の教養を高めたいと思う」[9号, 1981]。

「五月八日 福祉バスで東北方面へ花見の会を催した。先ず常陸大田市の西山荘を見学。瓜連町静神社裏手の牡丹桜公園に於て花見の宴を張り、帰途は笠間神社に参拝し惜春の行楽を心ゆくまで味わい、恵まれた意義ある一日の行楽であった」[15号, 1984]。

- (15) 「回復」「向上」という区分は、湯浅[1986:39-41]による、心理療法と瞑想法との基本的考え方の違いについての議論に示唆をえている。
- (16) 「茶飲み話」が全くなくなったとはいえないが、消失の傾向はたしかにあるようである。消失の主要な要因はのひとつは、青壮年世代における近隣関係の弱化的である。老人クラブの参加者のひとり(1987年8月のインタビューによる)は、今の近所づきあいは「アパート生活のよう」になってしまったと表現している。例えば、近くのおばあちゃんが寝込んで、行ってやろうとしても、「若い人がいやがる」ので行けないのだという。筑波研究学園都市の建設にかんしては、[桜村史編さん委員会, 1983]を参照。
- また、老人クラブのメンバーの一人は、次のように述べている(1987年8月のインタビューによる)。「うちでははあ、あんまり、仕事はやんねでいいって言うんだから。ただ、病気になんねでくださいよって、若い人ら言ってる。病気になったら、世話すんのが容易じゃねえから。病気になんねでいて、ただ丈夫でいてくれよって。」ここで語られているような労働の必要性の消失が、日常生活における秩序を維持しがたくし、人々の心理に不安定な感情をもたらすことは、容易に想像できる。
- (17) クロッケーがはじめられるさいには、村当局により、講習会・各老人クラブへの器具の寄贈・クロッケー場作りへの助成などがなされた。クロッケー導入後、「老人クラブだより」にも、クロッケーについての文が目立つようになる。クロッケーの練習に参加するのは必ずしも老人クラブのメンバー全員ではない。けれども、「老人クラブだより」をみると、練習の参加者にとって、クロッケーは、老人クラブの諸活動のひとつに含まれるとみなされている。年5回ほどあるクロッケー大会には、各老人クラブごとにチームがつくられて競技がなされる。各老人クラブ内におけるクロッケーの練習は、週に2、3日ずつおこなわれているばあいが多い。その活動の頻度の高さから判断するならば、クロッケーの導入は、桜村の老人クラブの活動の歴史のなかでも、比較的顕著な行動様式の変化であるといえる。なお、クロッケー大会は、1年のあいだに桜村老人クラブ連合会の主催で春秋2回、ライオンズ・クラブの主催で1回、商工会の主催で1回あり、さらに、農協の年金友の会に入っている人たちで、年金友の会の主催による大会が1回あるという。
- (18) 原[1981:46]、若本[1984:180]は、ゲートボールが日本人の平等観や集団主義などと親和性をもつことを指摘している。
- (19) ふたつの文章を引用しておく。

「クロッケー雑感」 [19号, 1986]

「外来語に弱いので辞典を見た。レクリエーションとは娯楽、休養、気晴、とある。レクリエーションクロッケー、ルール、ハンドブックの巻頭挨拶にコミュニティづくりと健康づくりに役立てば幸いとうたっている。然るに現在の動向を見るときどうだろうか？私は甚だ寒心事の様に思われてならない。各種団体主催の大会が年間数多く開催される。試合に臨むからには勝たねばならぬ。勝利の栄冠を掴む為、ひいては優勝を夢見ての猛練習誠に結構な話で頭の下る思がします。然し『レクリエーション』の原点が忘れ勝になり勝つことのみならず外を顧みないことは、どうだろうか。勝つことのみが総てなく娯楽が大きなウエイトを占めており両者成立して初めて大会が成功裡に有終の美を飾るものと思われま。チーム内での力量技術の違いは練習の度合、生来の運動神経の差異により個々の優劣の出来るのは不可効力の事でどうすることも出来ない。同じレベルを望むあまり些細な感情問題が悪化エスカレートし、狭いチーム内の円滑なる感情関係、チームワークを阻害し、ひいては支部内の円満なる共同体にも亀裂を生じ楽しい筈の面も強靱なる絆に危機感を持つものだ。近頃人生八十年と云われるが、(長寿の目からは笑止千万なれど)古希路ともなれば辿ると言う言葉の表現が適切かと思われる余生を楽しく生る事が第一条件であります。若し一部の足並が乱れんか？『一斑を見て全豹をトす』例え(物事のごく一部から全体を推察する意)他より白眼視されても致しかたない。レクリエーションの真の意味を解し温和な面も強力なチームづくりに努力し、楽しい老後のスポーツとして練習に試合に生きがいのある日々を送るうではありませんか。余生をレクリエーション球技に託してこそ真にコミュニティづくり健康づくりに役立つものと信じて止ません。ノクロッケー愛好会の一員として感ずるままに。蛇足の点ご寛容を乞う。」

「クロッケー雑感をよんで」 [20号, 1987]

「クラブだより十九号のKさんの記事をよみこんなに同じ考えの方がいるものかなと思った。Kさんの様な方が本当のクロッケー愛好家ではないでしょうか。それこそ身心共に健康なスポーツとして初期の目的に応える事も出来ましょう。私もクロッケーのお陰で大変友達も多くなりクロッケーの先輩達から親切な指導を受け本当に有難いと思った。心温まる思いで楽しい世の中になったなあと感激しています。人間だれでもその人なりの良いものを持っている。その尊い優れたものを採りだし、人生一本勝負の糧にするのも勉強のひとつでしょう。私は生来の百姓、やっぱり平坦な道ばかりではない。生かさず、殺さずといわれた農政は何時頃のことか、お天気相手の農業のことだ。そろばん通りにはいかない。秋の収穫もさりながら、生かされているという心がなかったらおしまいである。農業も今は国際的に変り精神力だけでは支えきれない。嫁さんが喜んできてくれる明るい農家になるのには何時頃の事か、ある新聞社のアンケートに生きる念願をと募集したら家庭の幸せが一位であったとか。私の部落では農家の老人が大部分。それで、農家に密着したいわば手作りクロッケーと云うことで四日に一回と次の様な日程をきめた。先ず健康を第一としクロッケーを取り入れました。(二)、家庭の一員として留守番も忘れぬよう。(三)、自家用野菜づくりも一日努めましょう。(四)、そして一日休養と趣味・夢もある筈生甲斐を見つけよう。



以上のように目標を掲げ楽しく励んでいます。一年に五回位試合もあるので、その時は周囲の状況を見て善処することにした。去年は一年間に一〇八日やっています。三・三八に一日の割合になっています。少しずつでもたしになりたい。若い者にも喜んで貰いたいというのがねらいです。年寄の杞憂でしょうか時代遅れでしょうか、皆さんの気を悪くしてもと、びくびくしながら投稿いたしました。」

- (20) 老人クラブの会長のひとりI氏(1987年7月のインタビューによる)の属する老人クラブでは、週2回ずつ練習が行われている。年に4、5回あるクロッケー大会の前には、晴れの日毎日練習するという。おなじ小学校区内の老人クラブ合同で、老人福祉センターで月に2回、練習試合がおこなわれている。I氏は、休憩時間について次のように話している。

「うちのほうは、こんど、まだ使っていないけどもね、休憩所もつくってありますし、畳も敷いてある、お座敷まであるからね。…[練習が]終わったり、休憩のときにはね。それと、みんなうちは、すぐ近くでもね、お弁当もったりなんかしていくから。それで、そこでいっしょに御飯をたべたりお茶を飲みながら、いろんな話をしてるわけ。」

- (21) I氏は、次のように述べている。

「(ここの地区の人たちと親しくつきあうようになったのは、やっぱり、定年のあとですか)老人会に入ってからが多いな。毎日のように、やってるから。もう、年寄りの人は、老人会のことばかりではなく、いろいろ、自分のうちのこととかよ、そのほかの相談までね、言ってくるようになって。『こんなときはどうしたらよからう』とかいうような。悩みごと相談までやるようになった(笑)。だけど、最近はなくなったよ。なんにも。ゲートボールをやったり、クロッケーをやったり、踊りをやったり、そういうほうだから、普通に悩んでるなんて人はいなくなった。ごたごたしてる人もいない。そういううちのことなんか、若い人にまかしているんだから。こんどは、いつは踊りだ、いつはクロッケーだっていうほうへ夢中になってるから。だから、もう元気で。『毎日いそがしい』なんて、みんなで忙しく。」(なお、文中の「踊り」とは、月2回、老人福祉センターで行われているものである。)

- (22) “ボケ”という言葉についての以下の解釈は、大貫による神仏の効験についての解釈や水子についての解釈に依拠している[大貫, 1985:221-224, 122-135]。

- (23) 前節において、定例会参加の主体的意味のひとつである「楽しみ」には、情緒性の「回復」に加えて「向上」が含まれると、われわれは解釈した。そのうち、クロッケー活動への参加の主体的意味にかんする本節の考察では、主として情緒性の「回復」の側面が見出された、といえる。では、情緒性の「向上」の側面は、どうであろうか。このばあい注目されるのは、練習中の主観的経験にかんする「若やいでくる自分の命」「乙女の如く若返るかな」という表現である。これらの表現は、悩みを「忘れる」という事態のみにとどまらないような、意識の特殊な昂揚状態を示唆している。それは情緒性の「回復」にとどまらず「向上」につながるものとして感じ取られているように思われる。この点についての検討は、より詳細な資料の収集にもとづき、別の機会に行われるべきものである。

クロッケー活動の今後のありようを展望するうえで、湯浅による次の議論は示唆的である。湯浅〔湯浅, 1986:55-60〕によれば、日本の武道の伝統においては、武道の本来の目的は、「身体能力の訓練を通じて心（精神）の能力を発達させていく」ところにある。いいかえれば、「感情をコントロールできる円熟した人格を発達させること」が究極の目的とされている。これは、仏教の運動的瞑想の修行法（身体器官の運動の訓練を通じて、高い変成意識状態に達しようとする方法）の影響を受けている。その影響のもとで、殺人剣から活人剣への変化や近代の合気道のありようなどに典型的にみられるような変容が生じた。「他人に対立し他人に勝つことを目標として生れた武術が、自分自身に勝つ技術に変わり、さらに他人と和し、他人と一体になる技術にまで変わっていったところに、日本の武道というものの重要な思想的意義がある」と湯浅はいう。

武道という一種の行動様式が、文化的伝統の影響を受けつつ、徐々にその性格を変えていったという点が重要である。クロッケーと武道がともに身体的競技であるということからも、武道の発展の仕方は、クロッケーのこれからの発展のひとつの可能性を示しているように思える。もちろん、実際のクロッケーのありようの変化が、主要には、当事者による具体的経験にもとづく模索をとおしてなされるものであることは、いうまでもない。

- (24) たとえば、柴崎部落では、戦前、年よりの男女の希望者によって構成された念仏衆があり、「普段は月に二回、1日と14日に、不動堂の横にあった、オコヤ（集会所）に集って、そこで仏様を拝んだ」という〔筑波大学民俗学研究室, 1984:88-89〕。老人クラブの参加者のひとり〔1987年8月のインタビューによる〕によれば、10数人ずつの念仏衆が各部落にあって、雨がふったときに、太鼓と鐘でリズムをとって念仏の練習をしていた。おもいおもいのごちそうをもってきて、食べる、お茶飲み会のようなものだった。お葬式の時にたのまれて、練習した念仏をとえながらお墓に亡くなった人を送るということをしたという。
- (25) たとえば、老後保障要求運動〔副田, 1984〕。
- (26) 〔副田, 1975〕, 〔瀬沼, 1984〕。
- (27) 〔上野, 1986:136〕。産業社会の支配的価値が、老年の生き方にネガティブな影響をもたらしていることを、複数の論者が指摘している〔井上, 1986:166〕, 〔副田, 1986:101〕。
- (28) 山村は、老年のもつ「ゆとりと叡知」の意義を指摘している〔山村, 1984:71, 1985:101-102〕。

## <文献>

綾部 恒雄 1988 『クラブの人類学』、アカデミア出版会。

Erikson, Erik H. 1950 Childhood and Society. → 1963 2nd ed. W.W.

Norton & Company. =1977 仁科弥生訳、『幼児期と社会 I』、みすず

書房。

- 1976 “Reflections on Dr. Borg’s Life Cycle”,  
Erikson(ed.) Adulthood, The American Academy of Arts and  
Sciences. = 1986 篠崎実訳、「ホルイ博士のライフ・サイクル」、  
『現代思想』14-1、116-143。
- 1982 The Life Cycle Completed, W.W.Norton & Company.
- 浜口 恵俊 1982 「日本人にとっての間柄」、『現代のエスプリ』178：  
5-23。
- 原 ひろ子 1981 「ゲート・ボール」、『思想の科学』129：44-48。
- 井上 俊 1986 「老いのイメージ」、伊東光晴ほか（編）『老いの発見 2  
老いのパラダイム』：163-184、岩波書店。
- 岩本 真代 1984 「ゲートボール競技の発生とその普及過程」、『民族学研  
究』10-4：174-182。
- 宮島 喬 1983 『現代社会意識論』、日本評論社。
- 1987 「現代日本の文化」、蓮見音彦ほか（編）『日本の社会 1  
変動する日本社会』：221-244、東京大学出版会。
- 大貫 恵美子 1985 『日本人の病気観』、岩波書店。
- Plath, David W. 1980 Long Engagements: Maturity in Modern Japan,  
Stanford University Press. =1985 井上俊・杉野目康子訳、日本人  
の生き方 — 現代における成熟のドラマ』、岩波書店。
- 桜村史編さん委員会（編） 1983 『桜村史（下巻）』、桜村教育委員会。
- 瀬沼 克彰 1984 『コミュニティの生涯教育』、学文社。
- 副田 あけみ 1984 「高齢者の社会運動」、副田義也（編著）『日本文化と  
老年世代』：405-446、中央法規出版。
- 副田 義也 1975 「老年期の学習と教育」、長谷川和夫・那須宗一（編）  
『ハンドブック老年学』：500-511、岩崎学術出版社。
- 1986 「現代日本における老年観」、伊東光晴ほか（編）『老い  
の発見 2 老いのパラダイム』：85-110、岩波書店。
- 筑波大学民俗学研究室 1984 『芝崎の民俗』（調査報告書）。
- 上野 千鶴子 1986 「老人問題と老後問題の落差」、伊東光晴ほか（編）

- 『老いの発見 2 老いのパラダイム』：113-138、岩波書店。
- 我妻 洋 1964 『自我の社会心理』、誠心書房。
- 1981 『社会心理学諸説案内』、一粒社。
- 山村 賢明 1969 「集団の情動的側面と母子関係」、『社会学評論』19<sup>4</sup>(76)：54-63。
- 1985 『家庭教育』、放送大学教育振興会。
- 1987 「核家族の功罪 — 他の家族形態との比較において」、『青年心理』63：66-73。
- 柳川 啓一 1987 『祭と儀礼の宗教学』、筑摩書房。
- 安田 三郎 1980 「行為の構造」、安田三郎ほか(編)『基礎社会学 第I巻 社会的行為』：2-28、東洋経済新報社。
- 湯浅 泰雄 1981 『日本人の宗教意識』、名著刊行会。
- 1986 『気・修行・身体』、平河出版社。
- 1989 『宗教経験と深層心理』、名著刊行会。

(なかやま しんご／筑波大学大学院)